立原道造記念館

題字・鹿野 琢見

特集
「立原道造生誕九〇年・没後六五年・開館七周年」に寄せて —その一—

はじめに

本年は、夭折の詩人・建築家 立原道造（一九一四—一九三九年）にとって、様々な意味で節目の年と言えましょう。

小館では、この記念すべき年を迎え、一年を通した特別企画展「立原道造の生涯と作品」を開催し、立原の多面的な世界の顕彰に努めております。

更に、館報誌上でも、立原へのメッセージをまとめた特集を組みたいと願い、各界でご活躍中の諸先生方にご寄稿を依頼いたしましたところ、嬉しくも多くの方々からご承諾のお返事を賜ることができました。なお、寄稿依頼にあたりましては、「ご都合の良い時期にご執筆を…、ひとことから、ご自由に…」といたしましたために、館報掲載は原稿の到着順にさせて頂きましたこと、寄稿文には長短がございますことを、申し添えさせて頂きます。

この号の編集後も、諸先生方からご寄稿頂けるとの沢山のお約束を賜っておりますので、次号以降、順次掲載いたしていく予定でおります。

（館長代理　宮本則子）

☆

生誕九十年

谷川俊太郎

生きていて九十歳になった立原は、詩を書き続けていただろうか。私は書き続けていなかったんじゃないかと思う。第二次大戦後に彼は詩から離れ、建築家として戦後を生きたのではないか、どうもそんな気がする。

立原は独特な調べをもった詩人だった。ともすればあてどなく流れ去ろうとするその調べを、彼はソネット形式という「家」の中で飼い慣らした。立原の「調べ」はおそらく戦争に抵抗できなかったから、彼はより確かな「家」のほうを選んだのではないか、というのが根拠のない私の想像だ。

建築にも詩はひそんでいる。ブロイヤーやサーリネンやイームズを知ったら、彼は詩から離れたことを後悔しなかったのではなかろうか。

（詩人　たにかわ・しゅんたろう）

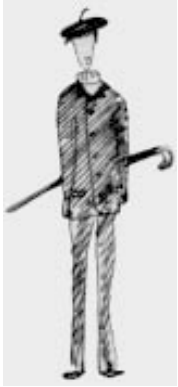
立原道造について

大岡　信

私がはじめて立原道造論を書いたのは昭和三十二年（一九五七年）だった。立原が亡くなったのとほとんど同じ年齢だった。私はそれから少したった頃、自分が立原のような「夭折」型ではないことを自覚したと記憶する。自分が、詩について考えることを書きしるすこ

第二十九号　目次

特集
「立原道造生誕九〇年・没後六五年・開館七周年」に寄せて —その一—　宮本　則子
はじめに　谷川俊太郎
生誕九十年　大岡　信
立原道造について
追悼文を読んで追悼する　財部　鳥子
高原の白面詩人　**倉橋　羊村**
もし出会っていたら…　山崎剛太郎
道造詩の朗読とそのかかわり　佐岐えりぬ
立原道造記念館　開館七周年に寄せて　小林　秀雄
変革志望　佐藤　實
同時代人立原道造　郷原　宏
立原道造記念館を設計した江黒家成のこと　佐々木　宏
ヒアシンスハウス—夢の継承—　永峰　富一
＊
立原生誕九〇年・没後六五年・開館七周年記念特別展
「立原道造の生涯と作品Ⅱ」のご案内・
主な出展リスト
「立原道造の生涯と作品Ⅲ」予告
後記　宮本　則子



とに、何かしら強い信念のようなものを感じていたから、それをちゃんと書き了えるまでは死ぬわけにいかない、という一種の使命感のようなものを感じていたのではなかったかと、誇大妄想的なことながら、思い出す。それから半世紀近くが経ってしまった。まだ、自分が立原みたいに「夭折」型ではないと自覚したころの「確認」の感じは思い出せるが、すこしもなすべきことはしていない、というずしりと重い感じは、相変らず自分の中にがんとして居坐っていて、「夭折」するには手遅れなのに、ちゃんとした死に方もできないでいる、中途半端な人間である私だけが、こうして七十年以上を、この地上ですごしている奇妙さ。しかし、二十六歳当時、はじめて立原論を書いたころ、不遜にも立原道造のことは全部分かったぞ、と思いこんでしまった感じを、ずっと後まで持ち続けていた傲慢さは、実をいえば今になっても持ち続けていたいと思っているのだ。

（詩人　おおおか・まこと）

追悼文を読んで追悼する

財部　鳥子

はじめて『立原道造詩集』を買ったのは、定価七十円の角川文庫だった。大陸から引き揚げてきて七年めの十九歳の秋。持ち歩いて毎日のように読んでいたが、編者の中村眞一郎の書いた「あとがき」のまだ生きていた頃の詩人の姿に出会うのもうれしかった。

そこでは道造は「マツチ棒のやうな感じに痩せ」「人間であるよりは、遥かに妖精に近いやうな雰囲気を、あたりに撒き散らし」ている。その人に会いたかった、会うことは可能だったのにと私は思った。彼が死んだ年に私は中国の北に住んでいて小学生だったが同じ地球に生きていたのだから。

そんなふうに考えている一ファンが度々読むのが室生犀星の「立原道造を哭す」である。室生家では相手の虚を衝いて「わあ?」と大声を出すのが流行っていて、毎日のようにそこへ立ち寄る道造もその遊びに加わり、やがて「わ!」という渾名さえついてしまう。避暑地での浮き浮きと楽しい日々の若い詩人に私はそこで出会う。やがて道造は旅の途中発病して死の床につく。

「立原君は二月を越え三月をおくり私の庭の白い椿を枕べに生けて見て、四月まで頑張つて生きとほしてゐた。あんなからだで能く生きてゐる偉いぞと思つたくらゐだつたが、四月になつて一週間ももたずに誰もゐないとき一人で死んだ。」と犀星は記しているが、この名追悼文にどうしてこんな堂々としたまちがいがあるのだろう。道造が亡くなったのは一九三九年三月二十九日であった。初出は同じ年の五月に発行された『新潮』第六号だったが、このまちがいはそのまま戦後一九四六年に出版された『信濃の歌』におさめられた。

道造が東京江古田の療養所に入ってまもなく犀星は詩人の津村信夫と連れ立って見舞っている。道造は「おにぎりくらゐの小さな顔になつて細い声で云つた。／『おくさんはどうですか。』」病床にある犀星夫人を案じたのである。帰りに二人は中野の鰻やに入り「とてもだめだな、立原君は死ぬね。」と犀星はいうが、彼の心のなかでは四月に入っても道造は白い椿を枕もとにかざって療養所に寝ている。私にはこのなぞはなぞのままでいい。

（詩人　たからべ・とりこ）

高原の白面詩人

倉橋　羊村

犀星没後、訪ねた軽井沢の室生家の庭は、夏の日盛りでも寂しかった。

夕ぐれが夜に変るたび　雲は死に
そそがれて来るうすやみのなかに
おまへは　西風よ　みんななくして
　しまつた　と

立原道造の「或る風に寄せて」の終章の一節だが、時刻は夕暮れながら、この時の光景を先取りしたような思いがある。

雨ざらしの木の椅子で、道造がそれに腰掛けてよく居眠りしたという椅子は、すでに見当らなかった。

庭から、犀星が机に向っている姿を見かけると、勝手にこの椅子に掛けて、黙って目をつぶっていたという。

時には居眠りが、本格的な昼寝になったこともあったらしい。

その姿を屡々見ているので、犀星はからかい気味に「睡い男」と渾名をつけて、独り頷いてみたりしていた。なにしろ五尺八寸の白皙の長身なので、折り曲げた足の長さが、すぐ目に入った。

話す時、咽喉の奥から太い声を出すので、よくひびく笑い声など「すでに

大家の如き堂々たる声量」と犀星は書いている。「大家の如き」という捉え方が、いかにも犀星らしい発想といえよう。

昭和十四年、白面二十四歳で亡くなっているので、むろんお目にかかることはできなかった。

生身に接していれば、つよい印象を受けた筈だが、作品や残された資料を手がかりにすることしかできないのは、もどかしく、残念である。

（俳人　くらはし・ようそん）

もし出会っていたら…

山崎剛太郎

文通だけをしていて、その相手とはついに会わないでしまったという友が立原道造には何人ぐらいいただろうか？あれだけ沢山な手紙や葉書を多くの人に出し、そういう交友が好きでもあった立原道造。時間があれば彼の膨大な書簡集を丹念に読んで、そのあたりを調べてみたい気もする。私がまさしくその一人だから。私は彼が他界する三カ月ほど前に、信濃追分からと、彼にとって最期の旅となった長崎からと、二通の葉書をもらった。そこには今は亡き七十有年に及ぶ生涯の友であり、詩人として大成した小山正孝が立原道造に送本して一読の労をお願いした私の若き日の小説『薔薇物語』に対する読後感が短く認めてあった。年変って昭和十四年三月二十九日、前夜の雪が止んだ朝早く、私は折からの朝日に光る雪解けの道を歩んで、中野療養所の入り口に立った。その私を待っていたのは彼の死であった。今思うと、なぜ私は彼の冷たい骸にさえ会わずに踵を返したのか不思議でならない。衝撃に打ちのめされていたのであろうか。

あの日から六十五年の歳月が私の上に流れた。立原は今でも詩のなかで生きている。死んだのは私かも知れない。もし、生前に彼と出会っていたら、私たちはどんな話をし、どんな未来を語り合っただろうか。私は今日と違う道を歩んでいたろうか。

（翻訳家　やまさき・こうたろう）

道造詩の朗読とそのかかわり

佐岐えりぬ

立原道造の名が浮ぶと私の頭の中では同時に、犀星、龍之介、辰雄、道造と一つの親しい系譜として連なってくる。犀星は道造をドウゾウと呼び息子のように可愛がっていた。縁あって、長年、私は犀星と道造、この全く質の異る二人の詩作品の朗読にかかわってきた。一九八八年、犀星生誕百年の「犀星展」が東京大森と金沢で開かれ、私は犀星詩の朗読をおおせつかった。その頃から私がポエム・コンサートと称して関西や東北、その他で行っていた音楽と詩の朗読活動に、道造の詩も加えるようになった。その他道造詩の朗読は軽井沢高原文庫や別所沼、多寶院での墓前、立原道造記念館建立以前から今日に至るまで鴎外荘での風信子忌の恒例として続けさせて頂いている。

犀星の命日は三月二六日、道造は三月二九日なので犀星忌と風信子忌はたまたま重ったこともあり、駒場の近代文学館で犀星詩の朗読を終えるや鴎外荘での道造詩の朗読に駈けつけるという危いこともあった。

二〇〇二年八月、金沢に犀星記念館が開館したその前年、長年続いてきた犀星会は解散し、犀星長女の朝子さんが亡くなり、私の犀星詩朗読は犀星記念館の開館催しと朝子さんの追悼会を以て最後となった。その後立原道造詩の朗読は最も大切な私の仕事と自覚を新たにしている。

道造の詩は音楽＝建築＝フォルムと三つの共通した要素によって構築され構想され、それらのエスプリが合体してポエジーを紡ぎ出している。それが一つの言葉として息づくまでには彫琢に彫琢を重ねたことだろう。建築家が緻密な設計図を何度も引き直すように、また作曲家が自らの裡にある音を探って幾度も音符を書き直すように。そうしてやっとソネットという詩形式に辿りつき、彼独特の詩という音楽を創り出すことができた。道造の詩自体が一つの音楽であるから道造の詩の朗読は、音声による演奏家が楽譜に忠実に再現してゆくものであり、何かを足したり引いたりすることは許されない。つまり俳優がせりふを感情移入するような詠み方はナンセンスでふさわしくないのだ。音楽的といえば中原中也の詩も四拍子で書かれており、私はそのリズムに忠実に詠むべきだと思っているが、誰もそんな詠み方に気付いた人はいなかった。道造も中也も音楽性はあるが詩質からいえば中也は生活の臭いのする生水で、道造は人工的に濾過された水といえるだろう。

どんな詩人の作品にも心の耳を澄ませばそれぞれに個有の内的リズムがあり朗読不可能な詩はないが、その詩の本質と特徴を捉えて如何に音声で再表現するかは自ずと異ってくる。また、詩文の朗読にアクセントやイントネーションを無視することはできない。関西ことばで書かれた諸作品を東京風に詠むと関西ことばのやわらかさやさしさが、冷い切口上に感じられその詩文のよさは表現されない。同様に江戸ことばで育ってきた芥川、堀、立原の作品を関西弁のアクセントで詠めば、グロテスクでナンセンスとなる。ところが犀星の場合はそのアクセントについて、気にすることはないと亡夫真一郎はよく言っていた。何故なら犀星の詩文には独特の、方言とも異る言葉があり、関東ことばに徹すると詩のおもしろ味が引き立たないという。

今後、道造の諸作品を掘り下げ掘り起してどのように詠んでゆくか、また朗読者の声の質や音域は生まれもったものであり、楽器の演奏者の音色も個々に異るように、それが詩人立原道造の体質や詩作品に調和するかどうかも気にかかることだ。道造の詩の弦の震えに耳を傾け、その痛みに耐えるのも詩人とその作品をより深く識る課題であろうか。

〔詩人　さき・えりぬ〕

立原道造記念館開館七周年に寄せて

小林　秀雄

いま私が手にしている一冊の楽譜、無伴奏混声合唱組曲「優しき歌」。一九六六年、当時三十五歳の私が作曲し、翌一九六七年、音楽之友社刊行の「合唱サークル名曲選」第十五集を初版として発表された四曲から成るこの組曲は、いまも同社から刊行され、大方の愛唱を頂いていることを、この上なく幸せに思う。私にとって混声合唱組曲では処女作であるこの曲の録音が、初めて訪れた本記念館内に、幽かに流れているのを知った時の私の感動は、到底筆舌に尽くし難い。この館で道造の強い存在感に包まれる人は、私一人ではないと思う。これを作曲した経緯について少しく申し上げたい。

奥付に《昭和二十七年（一九五二年）五月五日初版発行》と記されてある角川文庫の『立原道造詩集』は、私の二十歳代から今日に至るまでつねに座右にあり、私の精神の深奥に働きかけ、無限の光を照射し続けている。中でも多くの作曲家が付曲している「優しき歌」は、詩集を手にした当初からその虜になり、直ちに全曲の作曲を思い立ったのだが、こんな《身のほど知らずぶり》がいまは懐かしい。しかし、この詩に身心を沈めれば沈めるほど私は書けなくなった。長い懊悩の日々が過ぎるうち、私は「作曲しよう」という発想から脱し、「詩に身を任せよう」――すなわち「道造の詩魂に全託し、救われたい…」との心情が胸中に溢れてきた。静かに坐し、構えない素直な心で待っていると、ある楽想の湧き起こる気配があった。それは無伴奏混声合唱の響きでやって来た。すると不思議なことに、それまで手の届かぬ高みにあった《道造》は、私の傍らに降り立った――。「優しき歌」の楽譜の前書きに自ら記したこの件りを読む都度、胸が熱くなってくる。

なお、この曲の演奏で、一九八一年度のNHK全国学校音楽コンクール高校の部に参加した都立・八潮高校合唱部を、見事全国第一位の優勝に導いた指導者・平松剛一氏（当時同校教諭、現・平松混声合唱団主宰者）の叔父上、鈴木亨氏は、一九八〇年前後に「立原道造を偲ぶ会」を主宰しておられた方とのことで、この会のイヴェントでも鈴木氏の要請により、平松氏と同校合唱部による「優しき歌」の演奏が行なわれたと聞いている。また、同会の会報『風信子』の第三輯が私の手許にあり、いまも大切に保存している。

この曲はどこからの、また誰からの委嘱でもなく、唯々道造の世界への抑え難い憧憬から、自分のライフワークである〈作曲〉という行為でそれに寄り添い得たら――との切々たる願望から生まれた作品と言えよう。再度申し上げる。この記念館に足を踏み入れた途端、極めてリアルな道造の存在感に全身を包まれる幸せ、歓びを、何に例えようか。（二〇〇四年二月記）

〔作曲家　こばやし・ひでお〕

変革志望

佐藤　實

野田宇太郎さんが健在でいらした頃、来訪された盛岡市で立原道造の『盛岡ノート』を土産に買い求めてきたよ、といった主旨のお手紙に接したことがある。それは、盛岡市内の地元デパート別館から発刊した文庫版型のふらんす装アンカットでパラピン紙で覆ったものだったが、「こういうものはその地元でなければ出ない味わいがあり、そこに出版の意義や価値があるものだ」というような内容の文面で、すこぶる私を嬉しがらせてくれるものだった。後年、野田さんの郷国九州で、「柳川市に於てのみ発売するものである。」との趣意を添えた、北原白秋の柳河版『思ひ出』を発刊された旨をうかがっている。

その野田さんは最初の頃、私の立原論のある一部についてお気に召さなくて反対の一文を新聞学芸欄コラムかなにかに書かれたことがあった。手厳しいその文章に、名指しはなかったものの、まだ誰も立原のイタリア紀行についての論述等はなかったから、対象は自ずとその分野に踏み込んでいた自分の試論に向けられたものであることは明白だった。

野田さんの指摘された部分は、私が「長崎ノート」での「頽廃」や「異国趣味」の南蛮という既成像を揺がす個所だった。野田さんは立原の文学が典雅であり優美な詩風を構築しているという既成像から、突如として異質の説の出現したことが不満で、有り様がなく、有り得ない事柄として咎められたもののようだった。

野田宇太郎氏といえば文学散歩の創始者であり、『パンの会』や『日本耽美派の誕生』の著者であって、その敬愛する野田さんからきつい一喝を喰らったような衝撃を受けたものだったが、私は「長崎ノート」の該当部分を再説することに努めた論述をつづけた結果、野田さんはやっと理解され受け入れられて、ご自分の立原像に修正を施され、それ以後お近づきを得たのだった。

このように野田さんさえ惑わしたかのような新たな言語世界への踏み出しなど、立原道造の変革志望は彼の内で確実に醸成されていたのだった。

ところでもはや「盛岡ノート」や「長崎ノート」は人口に膾炙したと見なし得ることによって、単なる創作ノートではなくなった感が深い。夭折の立原道造文学の棹尾に据えるに相応の、生涯の作品となった。そういっても少しも誇張にはならないだろう。

（詩人　さとう・みのる）

同時代人立原道造

郷原　宏

昭和二十八年（一九五三）冬、シベリアから帰還した石原吉郎は、舞鶴の引揚者収容所で二冊の文庫本を手に入れた。その一冊は堀辰雄の『風立ちぬ』だった。それは長らく彼の記憶のなかに凍結されていた日本語との、まぶしいばかりの再会の瞬間だった。「おれに日本語が残っていた……」息づまるような思いで、彼はつぎつぎにページを繰った。巻末に立原道造の解説があった。その解説が彼の詩に対するのめりこみを決定した。東京へ着いた日に、彼は文庫本の立原道造詩集を買い求めた。そして翌日から、のちに詩集『サンチョ・パンサの帰郷』（一九六三）に収められることになる詩を書き始めた。（石原吉郎『断念の海から』）

このエピソードを直接石原吉郎の口から聞いたとき、私はそれを石原における「近代詩」との邂逅として受け留めた。それというのも石原は当時五十歳でばりばりの「現代詩人」、立原は四半世紀も前に亡くなった「近代詩人」だったからだ。この印象には、おそらく私自身の年齢が影を落としている。昭和十七年（一九四二）生まれの私にとって、大正四年（一九一五）生まれの石原はまさしく父の世代であり、それゆえに敬愛と反撥の対象でありえたのだが、私が生まれる三年前（昭和十四年＝一九三九）に世を去った立原は、どのような意味でも同時代の詩人とは思えなかった。つまり私にとって立原は、島崎藤村や萩原朔太郎と同じく、すでに評価の定まった過去の詩人だったのである。

ところが、昭和五十二年（一九七七）秋、石原吉郎が自決同然の死を遂げて、急遽その年譜を編んでいたとき、私は遅蒔きながら石原と立原の年齢差がほとんどないことに気がついた。立原は大正三年（一九一四）七月、石原は大正四年十一月生まれだから、たった一歳と四ヶ月しか違わない。すなわち石原はまったく同世代の先輩として立原道造の詩集を読み、その言葉の力に促されて自ら詩人としての第一歩を踏み出したのである。したがって石原が「現代詩人」なら、立原も当然「現代詩人」と呼ばれなければならない。

平成九年（一九九七）暮に嵯峨信之が亡くなったときにも、改めてそのことを痛感した。嵯峨は『詩学』の編集発行人として戦後詩の一方の流れをつくった詩人だが、生まれたのは明治三十五年（一九〇二）だから、立原より一回り年長である。ちなみに

嵯峨と同じ一九〇〇年代生まれの詩人には、三好達治、草野心平、小野十三郎、滝口修造、伊藤整、伊東静雄、井上靖、天野忠などがおり、日本現代詩がこの世代の詩人たちによって形成されてきたことがわかる。これらの詩人たちから見れば、立原はいつまでも歳をとらない末弟のようなものだといっていい。

立原道造もし健在なりせば、今年九十歳。現役の詩人として「のちのおもひに」に続く思いを書き綴っているかもしれない――などと考えると、なんだか楽しくなってくる。

（詩人　ごうはら・ひろし）

立原道造記念館を設計した江黒家成のこと

佐々木　宏

立原道造記念館はかなりユニークなデザインであり、とくに立面の大きな白い壁の上部に、立原が詩集『萱草に寄す』でカットに用いたハンガリーのルードヴィヒ・コズマ作「笛を吹く少年（仮称）」のヴィネットを配しているのが印象的で好ましく、立原の記念館にふさわしい。設計したのは建築家の江黒家成で、実施計画までに十五案も作成してとても苦心したと記している。（館報『立原道造記念館』創刊準備号、九六年一月二八日）

わたくしが江黒と初めて知り合ったのは、八一年四月一二日、日本橋公会堂での「立原道造を偲ぶ会」に参加した時である。その日は、杉浦明平の講演があり、参会者の間で、行方不明になった立原の卒業設計の図面のことや、刊行されたばかりの森村誠一氏の推理小説『火の十字架』の中に立原の詩が引用されていることなどが話題になった。散会の後で、それまで未知だった江黒が声をかけてきて名乗り、立原が石本建築事務所で描いた図面の原図を所持していると語ったので、コピーを所望した。しばらくして青い陰画の図面が送られてきた。

それらの入手の経緯については、話してくれた内容とほぼ同じなので、彼自身の文章を引用する。彼が勤務していた当時、石本事務所では「石本先生の他二名位しか立原に関心を持つものが居らず、（中略）先生は立原の話になると何故か避けるふうにも感じられた。そんな中で立原が作図した石本邸の図面や履歴書、立原が盛岡から帰京した直後に事務所に出された水戸部さんの辞職願などを先生に懇願して入手した」（『風信子通信』第一号　九四年一二月二五日）と記している。

江黒から送られてきた図面によって、雑誌や本で知っていた有名な石本喜久治邸を担当したのが立原であったことを初めて知った。（これらについて図録『「優しき歌」の世界』に寄稿したことがある。九九年三月二七日）

江黒と同僚だった建築家の吉田憲一氏は、ワシントンハイツの米軍宿舎の仕事を一緒にしたことがあり、立原道造を「大変尊敬して」いたと私信で伝えてくれた。

江黒家成は一九二七年四月二二日生まれ、埼玉県立深谷商業学校を経て、四五年四月に武蔵工業専門学校（現在の武蔵工業大学）に入学、四八年三月卒業、五〇年石本建築事務所に入所、五五年に退所、独立して建築事務所を開設した。得意分野は集合住宅、病院、物流センターであり、生前に公表した主な業績は、北深谷病院、日本金属埼玉工場、本庄深谷市立図書館、新利根大栄各小中学校、熊谷行田市営住宅、大正堂本社及各支店、岩崎邸、鎌倉大原邸などである。（『日本建築家協会名鑑』九七―九九年版による。）

どういうわけか江黒は立原道造記念館を省略している。それは江黒の人柄を表しているのかもしれない。しかし、この建築の設計者として江黒家成の名を忘れることはできない。彼は二〇〇二年三月五日、七四歳で亡くなった。

関係資料について武蔵工業大学、石本建築事務所、吉田憲一氏、立原道造記念館のご協力を頂いたので、謝意を表します。

（建築家　ささき・ひろし）

ヒアシンスハウス
―夢の継承―

永峰　富一

もう七、八年ほど前になるだろうか、ヒアシンスハウスが私の地元の別所沼に計画されていたことを、ある会で隣り合わせた江黒家成氏からうかがった。江黒氏は立原道造記念館を設計した建築家であり、その時に、吉武泰水先生が立原道造の二学年下であることも話されて、それが私とヒアシンスハウスとの関わりの始まりだった。学生の時から御指導いただきながらも御迷惑ばか

りかけていた不肖の弟子として、また地域のまちづくり活動のひとつとして、私でも役に立つのではないかという思いがふくらみ、「ヒアシンスハウスをつくる会」の活動となり、「詩人の夢の継承事業（さいたま市政令市記念市民事業）」として今日にいたっている。ヒアシンスハウスの建設は、秋の竣工を目標に募金活動も進み、四月初旬に着工する予定だ。（http://www.tachihara.jp/info2-8/index.html 参照）

立原の手によるスケッチをもとに、実施設計を生田勉研究室出身の太田邦夫氏が統括し、記念館協力者の津村泰範氏によって作図され、環境プランナー山中知彦氏、建築家三浦清史氏、文化財建造物保存協会の窪寺茂氏たちと議論が重ねられている。平面スケッチは大きく二通り、三案あり、生田家所蔵の案と、神保家所蔵の案を中心に検討がなされた。その二案の違いは窓廻りのディテールであり、雨戸を戸車で吊っていて戸袋がないことが神保家所蔵案の特色である。このディテールを立原は得意げに親友の小場氏へのはがきにも書き込んでいる。立原のメカニカルな技術への嗜好に興味がひかれるところだ。敷地が当初に構想された沼の東岸から西岸になったので、配置、つまり窓と沼との関係について再検討がなされた。コーナーの窓はもっとも立原の思い入れを感じるところであり、窓からの光と影を大切にして、原案どおり東南に開かれた窓とすることになった。窓にもたれる詩人の姿が目に浮かぶ。ところで、その窓はコーナーを欠き込むというコンクリート構造によって可能となった近代建築の手法によるものであり、北側机の前の窓も水平連続窓であって、同じく近代建築の手法である。当時の教室にはコルビュジェに夢中であったといわれた丹下さんもいて、優秀な学生であった立原がモダニズムの手法に習熟していたことがうかがわれる。一方、そのコーナーの窓も北側の窓もガラス戸から離れて独立柱が一本残って立つ。コーナーの窓を開け放つと、出隅に柱が一本立った能舞台か残月床のような構えの設いとなり、庭屋一如の空間、別所沼と一体化した開けた空間をつくり出すこととなる。日本の伝統的な空間構成の手法である。ヒアシンスハウスは伝統とモダニズムに通低したデザインによって語りかけている。

卒業設計「浅間山麓に位する芸術家コロニイの建築群」に見られる北欧への憧れ、とりわけヴォルプスヴェーデの画人フォーゲラーに寄せる立原の憧憬とヒアシンスハウスの空間を重ねると、時代に多感な、しかし当時の機能主義から距離をおいた建築家立原道造の姿が浮かび上がるだろう。

それにしても立原と青春を共にした人たちがいま舞台の幕を引きつつある。生田さんも小場さんもすでにいない、吉武先生も《早く作れよ、僕も見に行くから》といってくださったのだが、残念なことに間に合わなかった。亡くなる前にもソネット「私のかへって来るのは」を前田愛が『都市空間と文学』で論じていることを教えていただき、立原が卒業論文で述べている《住み心地の良さ》は人と建築の大切なことであって、ヒアシンスハウスを造ることは現代建築にとっても意味がある、と楽しそうに話しをされて、《立原さんの住宅の図面は本当にすごかった》と思い出を語られた先生のお顔はいまも心に残る。忘れられない御自宅でのひとときであった。

こんな文に目がとまった。

私たち自身に吹く風にも昔の人々を包んでいた息吹がまざっていないだろうか、私たちが耳を傾けている人びとの声のなかに、いまは沈黙してしまった人びとのこだまが響いていないだろうか。もしそうだとすれば過去の世代と私たちの世代の間には秘密の約束があったのだ。そうなれば私たちは期待されてこの世に生まれてきたのである。

（ベンヤミン　好村富士彦訳「歴史の概念について」所収）

建築家として実現することができなかったヒアシンスハウスの夢を私たちが継承することには、過去の世代との秘密の約束があったのだ。それは同時に、私たち誰でもが持っている実現しなかった夢をいつか誰かが引き継いでくれる約束があることを示唆している。そうなれば、私たちを包む世界もより豊かな世界としていま私たちに開かれてくるだろう。全国から多くの人の御協力をいただいているが、どの人の心の内にも立原道造の詩が歌われ、かつて歌われた詩がいま再び想い起こされているようだ。ヒアシンスハウスの夢を継承することは立原道造が私たちと共に生きる、ともいえそうだ。ヒアシンスハウスの室内にはスケッチに描かれているテーブルや椅子、ランプ、ワインの瓶なども置くつもりでいる。別所沼に散歩に出かけている道造がふらりと帰って来る、そんな雰囲気を感じられればと思う。

立原道造は不在だが、多くの人が別所沼を訪れてくれることを願っている。

（建築家　ながみね・とみかず）

立原生誕九〇年・没後六五年・開館七周年記念特別展

立原道造の生涯と作品Ⅱ

弥生の青春―高校から大学時代―

会期　二〇〇四年三月二七日～六月二七日

主な出展リスト（分類別制作順［ ］は補記）

＊草稿

［短歌会詠草］「一月例会」［1932.1］
「一年を顧みて」［1932.2.26-3.3］
「問答」［1932.7-8］
「手帖」［1932.11-12］
無題［二十二日の朝］［1934.8］
「秋の歌」［1934.9］
「唖蝉の歌」［1934.11-12］
「序曲」［1934.11-12］
「巣立ち―堀辰雄氏に」［1934.12-1935.4］
無題［室生犀星論］［1935.2-4］
「林空」［1935.6］
「風に寄せて　その一、二」1935.7
無題［春のこころつき］［1935.11-12］
「建築衛生學と建築装飾意匠に就ての小さい感想」［1936.3］
「晩き日の夕べに」［1936］
下書き草稿　卒業論文「方法論」［1936］

＊絵画〈初公開四点〉

パステル画　無題［自画像］［1927-31］
パステル画　無題［飛行船Ⅰ］［1930-31］
パステル画　無題［山峡の風景］［1931夏〈初〉
パステル画　無題［山峡の家］［1931夏〈初〉
水彩画「学園ノ小春日」［1931-33］〈初〉
水彩画「駒場の朝」［1934］〈初〉

＊書簡

生田勉宛はがき　1933.7.28　東京沢井
立原光子宛封書　1933.7.30付　山より［消印不明］
伊達嶺雄宛封書［1935］6.10付
生田勉宛はがき　1936.3.23　日本橋
小場晴夫宛はがき　1936.3.30　日本橋
生田勉宛封書　1936.7.12　軽井沢
小場晴夫宛封書　1936.7.18　軽井沢
小場晴夫宛封書　1936.8.12　軽井沢
堀辰雄　立原道造宛はがき　1932.11付　浅草
堀辰雄　立原道造宛封書［1936］11.13付［消印不明］

＊ノート等

ノート「Miscellaneos!」［1931.5］
ノート［FIRST］［1931-34］
ノート［昭和八年ノート］［1933.1-1935.4］
ノート［昭和九年夏ノート］［1934.7.22-8.23］
ノート［タウトノート］1934.7.9-17
ノート「建築意匠装飾」［1935-36］
スケッチブック「1」［1935.8下旬-9.20］
スケッチブック「3」［1935.12下旬-36.3下旬］

＊設計図・エスキス

設計図「体育館　水泳場及び氷滑場」1936.2.7
設計図「図書館設計図」1936.7.7
スケッチ「温泉旅館ロケーション」［1934.10］
スケッチ「課題設計　軽井沢の小学校のプラン」［1935春］
スケッチ「Lodge and Cottages」［1937.2］
スケッチ「HAUS・HYAZINTH」1938.2
模型「ヒアシンス・ハウス」1983.4

＊手づくり詩集

「詩集『さふらん』」1932［復刻］
『日曜日』［1933.5］
『散歩詩集』1933夏［復刻］
『散歩詩集』異稿　無題［村の詩　朝］［1933.8-12］
『散歩詩集』異稿　無題［村の詩　夕］［1933.8-12］
『散歩詩集』異稿　無題［口笛を吹いてゐる散歩者より］［1933.8-12］
『散歩詩集』異稿　無題［噴水］［1933.8-12］
『ゆふすげびとの歌』［1937.2］

＊書籍

第一詩集『萱草と寄す』1937.5.12　風信子叢書刊行所
第二詩集『暁と夕の詩』1937.12.20　風信子詩社
『立原道造全集』全3巻　1941-43　山本書店
『立原道造全集』全3巻　1950-51　角川書店
『立原道造全集』全5巻　1957-59　角川書店
『立原道造全集』全6巻　1971-73　角川書店
三好達治『南窗集』市井発売本壱百部の内　1932.8.1　椎の木社
萩原朔太郎『氷島』1934.6.1　第一書房
丸山薫『鶴の葬式』1935.5.5　第一書房

＊雑誌

『詩歌』第12巻第9号　1931.9.1　白日社
『四人』1号　1932.11「四人」クラブ
『こかげ』第1-4号　1932.2-12
『校友會雑誌』第335号　1932.2.20　第一高等学校校友会
『校友會雑誌』第342号　1933.6.21　第一高等学校校友会
『僞画』第1-3輯　1934.6-11　僞画社
『四季』創刊号-第3号　1934.10-12　四季社
『未成年』創刊号　1935.5.1　文圃堂書店
『コギト』第40号　1935.9.1　コギト発行所
『四季』第12号　1935.10.5　四季社
『作品』第70号　1936.2.1　作品社
『建築』再刊第1号　1936.7　木葉会

＊学校関係資料

第一高等学校校章
第一高等学校「身分證明書」1933.5.1
第一高等学校卒業証書　1934.3.31
「東京帝國大學工學部學修簿」1934-37
「東京帝國大學工學部講義要目　昭和拾年」1935.3.28
辰野賞銅牌　昭和10年・11年・12年　1935-37
東京帝國大學學生証　1936.4-37.3
寄書「新創会謝恩会」1937.3.22
「東京帝國大學工學部學士試験合格科目及び論」1937.3.31
卒業記念アルバム『NOVA SAUT』1937.3

＊その他遺品など

後記

本号は、「立原生誕九〇年・没後六五年・開館七周年」に寄せる特集号として編集しました。

本号に掲載した一頁の写真「自室のベランダにて」は、伊達嶺雄が一九三七年春頃に撮影したものです。また、一頁のカットは猪野謙二宛はがき（一九三七年）に、二頁から七頁のカット七種はスケッチブック（一九三五―三六年頃）に、立原が色鉛筆で描いたものです。なお、これらのカット八種は、本年の風信子忌を記念して制作した「一筆箋」四種（頒価各三〇〇円）に使用されています。

＊

立原生誕九〇年・没後六五年・開館七周年記念特別展予告

立原道造の生涯と作品Ⅲ

夢みたものは……

―詩人・建築家として―

会期　二〇〇四年七月一日～九月二六日

（宮本則子）

立原道造記念館　第二十九号
発行日　二〇〇四年三月二九日
発行人　鹿野琢見
発　行　立原道造記念館　〒一二三―〇〇三三
東京都文京区弥生二―四―五
電話〇三（五六八四）八七八〇
編集代表　宮本則子
http://www.tachihara.jp/【URL変更】
ISSN　1342-8462